

# 白金霞

十一月



平成25年11月発行 第33号

白金葭定例会案内

十一月 29 日(金) 10:30 千駄木駅待合せ 隅外記念館 隈吟行

句会場(アカデミー向丘 13:00 ~ 17:00)

十二月 20 日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第四学習室)

兼題:葱、湯たんぽ

一月 17 日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室)

兼題:新年一般

二月 21 日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室)

兼題:春の日、蝶

葱、湯たんぽの参考句 (十二月二十日分)

藤田湘子

奈良岡晶子

永田耕衣

石川正幸

飯田龍太

中西咲央

水原秋桜子

久保田万太郎

大須賀乙字

大和田享子

浅井陽子

からたちの小径 詠を聞く 朴落葉

増田陽一

浦島の歌の終りて 冬青空

シート干す 血の赤蜻蛉来てとまる

朴落葉 また幾年の落葉かな

はや冬の空に 縋るる 鴉かな

朴落葉 合掌部 落頭はるる

逢ふも 遇ひたり 命八ツ 林檎哉 (別所線)

光成高志

月例会会報 (13 / 11 / 15 7 名欠 1 立冬、朴落葉)

飯田孝三

虚子庵

たまさかの客と 紫苑にもてなされ

(虚子に「人々に更に紫苑に名残あり」)

「小諸百句」口づさむ 柿日和

立冬の灯見上げつ 吾妻橋

黄落の真中や 学徒出陣碑

からたちの小径 詠を聞く 朴落葉

増田陽一

朴落葉天狗の団扇とところどころ

立冬や「夢判断」の夢の中

黄落や妻の裸体の絵を残し（無言館）

望月に草競馬見る文化の日

冬に入る巻織<sup>けんちん</sup>汁の実沢山

朴落葉並べて靴屋<sup>ぐつや</sup>ここの子

柄ごと落つ風のいたづら朴落葉

農耕馬もレースに挑む文化の日

湯吞茶碗ひとつ壊れて冬に入る

小説に犯人探す夜長かな

こおろぎや長湯のくせの終ひ風呂

雪の富士車窓に故郷近づけり

立冬の朝の茶粥に舌を焼く

朴落葉ふむや秘湯の一軒屋

光  
みち

朴落葉いちまい渡る谷の空

舌打の笹子が藪に冬はじめ

漱石の墓を聞かれて日短か

シヨール飛ぶまじくと巻いて九十九里

裏側はしろがねに濡れ朴落葉

浅野正美

立冬やミルクココアを熱くして

子らは皆家庭を持ちぬ朴落葉

銀杏散る箒目美しき法林寺

球根みな植ゑおへし小春の日

その人も同じ鉢買ふシクラメン

青木啓泰

冬木立透けて夕焼あふれをり

立冬や干し柿だんだん嘘をつく

裏木立のすき間弛びて冬に入る

柿食つて正倉院の戸籍かな

頃合を見て発つ鴉の黒さかな

松村幸一

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4	銀杏散る箒目美しき法林寺	正美
4	黃落の真中や学徒出陣碑	孝三
3	冬に入る巻織汁の実沢山	みち
3	立冬の灯見上げつ吾妻橋	孝三
3	朴落葉並べて靴屋ごつこの子	みち
3	漱石の墓を聞かれて日短か	幸一
3	黃落や妻の裸体の絵を残し（無言館）	高志
2	冬木立透けて夕焼あふれをり	啓泰
2	柿食って正倉院の戸籍かな	〃
2	朴落葉ふむや秘湯の一軒屋	多美子
2	逢ふも遇ひたり命八ツ林檎哉（別所線）	高志
1	裏側はしろがねに濡れ朴落葉	幸一
1	その人も同じ鉢買ふシクラメン	正美
1	湯呑茶碗ひとつ壊れて冬に入る	みち
1	立冬や干し柿だんだん嘘をつく	啓泰
1	立冬の朝の茶粥に舌を焼く	多美子
1	からたちの小径跡を聞く朴落葉	孝三
1	シヨール飛ぶまじくと巻いて九十九里	幸一
1	柄ごと落つ風のいたづら朴落葉	みち
1	朴落葉また幾年の落葉かな	陽一
1	子らは皆家庭を持ちぬ朴落葉	正美

1 1 朴落葉いちまい渡る谷の空  
「小諸百句」口づさむ柿日和  
幸一

舌打の笹子が藪に冬はじめ  
孝三

小説に犯人探す夜長かな  
幸一

はや冬の空に縛るる鴉かな  
多美子

裏木立のすき間弛びて冬に入る  
陽一

望月に草競馬見る文化の日  
啓泰

こおろぎや長湯のくせの終ひ風呂  
高志

立冬や「夢判断」を読みかじる  
多美子

立冬や「夢判断」の夢の中  
高志

雪の富士車窓に故郷近づけり  
多美子

球根みな植ゑおへし小春の日  
正美

農耕馬もレースに挑む文化の日  
みち

浦島の歌の終りて冬青空  
陽一

朴落葉合掌部落頭はるる  
〃

頃合を見て発つ鴉の黒さかな  
啓泰

一句鑑賞

朴落葉また幾年の落葉かな

光成高志

陽一  
朴は落葉高木で葉の長さは30 cm 以上あつて大きい。遠くからみても朴の木とわかる。冬始めに落葉となつて落葉の主役をなす。古い落葉の上に降りつもる。幾年経てもその上に降りつもりやがて朽ちて土になる。今の朴落葉もまた

幾年いくとせの落葉として年を経るのである。人も同じく年を経るという作者の感慨まで想像できる。

### 裏側はしろがねに濡れ朴落葉

幸一

朴の葉は枯れてくると表に巻くので、落葉になると殆ど裏を上に見せている。裏は白っぽいので朴落葉ばかりの地はしろがねの地になる。「しろがねの落葉つくして朴頭てり（服部早苗）」という様相になる。「朴落葉白しおほかた裏返り（岡本眸）」という素直な句もある。掲句は雨か霧かに濡れた朴落葉の裏側の描写であり、周りの落葉に比べ大きな朴落葉の白々した様相に驚いたのだ。

### 銀杏散る箒目美しき法林寺

正美

銀閣寺や大徳寺などの名園の情景を想像して選をしたが、正美さんによると地元の法林寺での囑目であるとか。そういえば、先月の沼南にある結縁寺でも掲句のようであった。掃かれた直後の庭は箒目残り、掃き様に一定の規則があつて美しかった。黄葉した銀杏が載っていた。

### 黄落の真中や学徒出陣碑

孝三

戦時中、今の東京の国立競技場で、学徒出陣の壮行会が行われてから十月二十一日で七十年となり、九十歳に達した元学徒らが、競技場にある慰霊碑の前で、追悼会を行った。慰霊碑は、七年後のオリンピックに向けた競技場の建て替えて、いったん撤去されることになり、この場所での追悼会は今回が最後かもしれないと皆が話し

ているとか。七年後は皆九十七歳になられるのだから。掲句はそういう今の状況を踏まえ、黄落の真只中に建っている「出陣学徒壮行の地」碑を詠って、その歴史的事実の感慨を述べたものだ。幸一さんが言われた「銀杏散るまつただ中に法科あり」（青邨）に遠く響いている。柿食つて正倉院の戸籍かな

啓泰

「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」が正倉院に残された最古の戸籍である。「たいほうにねんみのこくかもぐんはにゆうりこせき」と読む。大宝二年は西暦七〇二年から、今から一三一年も前の戸籍である。戸籍は三〇年経つと廃棄されるから、これは偶然残つたものだ。律令時代の公文が残つた。「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」（子規）ならずとも、柿食つて正倉院の戸籍かな（啓泰）である。国民の生活に直結した戸籍かなである。

### 一句鑑賞

飯田孝三

### 朴落葉並べて靴屋ごつこの子

みち

大きな朴落葉を見た途端、イマジネーションが膨らむ。大人の靴だ。それを並べて、子供たちが靴屋さんごっこ。日本版デズニの絵本を繰るようだ。小さな靴屋さんが大人の大きな靴を並べ、買いにくる客も子供、なんとも夢があつて面白い。名詞止め、ごつこの「子」が利き、店先での子供たちの動作や口上がありありと見え、聞こ

えてくる。リズムがいい。オ音3連、4連、ア音3連を含む音調は滑らか、更に、中下にかけてのk(g) 5音の量が屈託なく、感興を高める。情韻相剰の妙。句はリズム、「舌頭に千転」もつまりそれだろう。

### 漱石の墓を聞かれて日短か

幸一

初冬の日、雑司が谷の墓地で漱石の墓の在り所を尋ねられたのである。墓域の径を歩いていたのだ。同墓地には多くの文人その他著名人が眠る。釣瓶落しの極まつた日は、既に西に落ちかかっている。ふつと、無常迅速を思う。低徊派の漱石ならではの句である。例えば、明治を代表する、一方の文豪、学者、隅外では句になるまい。日常の一齣を詠んだと思うのだが、漱石の生きた時代とその生涯に通じなければ、決して口をつかない一句である。止め、日短「か」の述懐が深い。

### 無言館

### 黄落や妻の裸体の絵を残し

高志

戦没画学生に捧げるレクイエムである。「無言館」は、信州塩田平にある戦没画学生慰霊美術館（信濃、デッサン館分館）、真言宗前山寺の参道のほとりにあり、寺領は黄落の盛り。館内には故郷、家族、恋人、友人らの風景画、人物画や自画像など多くの遺作が展示される。中でも目をひくのが、若妻を描いた裸体図。入館者は思わず目頭をおさえ、或は噺びを咏える。「裸体」が句の要とみたが、

句会の合評では幸一さんが寧ろ「裸」を推され、陽一さんも同じられる。確かに、結婚して間もない妻への万斛の思いを残す、生の人間の情愛がより直裁に伝わる。比べて、「裸体」は、そんな思いを残しつつ、時勢もだしがたく、「国の大事に殉ずるは・・・」とて、応召し、悲運、戦野に斃れた兄等<sup>せいら</sup>を悼み、哀惜する。そんな戦没者により思いを置く。前者は人の切々の情に感じ、後は画面の像に、戦没者の愛惜の情と無念の結晶を見るのである。かくして「裸体」は、芸術の境に昇華し、永遠の生命を得る。そう思いたいのだが。連用止め、日短「し」に万感。

（出句一覧掲載順）

### 一句鑑賞v（32号分）

武者昭七

### 落花生ぼつちの黒さ筑波晴れ

高志

「ぼっち」については32号5ページに高志さんが丁寧な説明をしておられる。大言海には秋田県の方言として「頭巾」の意味に使われるとあるが高志さんも「頭にとんがり帽子のようなワラの屋根をかけた」と書いておられる。「筑波晴れ」とは地元言葉、だるうがさわやかなイメージが伝わってくる。響きもいい。筑波山は男体女体の二つの峰にわかれ女体のほうがほんのすこし高く標高八七六メートル。万葉集にも登場する古来の名山だ。すつきりと晴れ上った秋空を背景に悠然とそびえる名山、

ふもとにはぼつちの黒点が輾転と広がる。陽光あふれる印象派の絵を思わせてぼつちの黒は点描である。

### 落花生食ふべ肌よき嫁御寮

孝三

落花生を食べたからビハダになったとは保証の限りではあるまいけれど、そう詠むことが「俳諧」というものであるらしい。周囲に対する細やかな気づかいであり挨拶であり、同時に諧謔でもある。ただし「挨拶」や「諧謔」も度が過ぎると嫌味になるから用心。

### 秋の水霊狐泉の闇に音

みち

### 笹鳴や佐助稲荷に奥社あり

高志

ご夫妻で鎌倉を訪ねた折の作とお見受けした。佐助稲荷は同じ鎌倉でも八幡宮や小町通りの雑踏とは打って変った静寂の地であり、古来「隠れ里」と呼ばれた秘境である。霊狐泉は稲荷社わきの洞窟から湧き出す泉。洞窟の闇の奥から伝わってくる水音に神秘が漂う。それをとらえた作者に敬意。動詞を排して体言のみをつらねて陰々とした効果を生んだ。奥社の周辺は巨石にかこまれている。古代の人々は巨石にはカミが寄り付くものとした。古代信仰に思いを誘われる場所である。結句に作者の恐れと驚きがこもるとみた。

### 靱殻焼く畑のあちこち煙たつ

正美

懐かしい情景である。めったに出くわすことのない情景だけれどローカルな旅などで出くわすとなんともここ

ろやすまるのはやはりぼくらが農耕民族の末裔だからだろうか。いつまでも消えてほしくない情景である。

### ハガキ句三十四報（08／2／26）

ジャコメッテイ創る影凝る雪催ひ

孝三

回転木馬の影入れ替る春隣

〃

花束を卒寿祝ひに遅日哉

圓子

春の雪二・二六の年生まれ

妙子

寒満月子別れの儀のありそうな

始子

バス停に理想郷あり涅槃西風

高志

ビル多き佃島にも露の臺

〃

忘れ物して身の軽き余寒かな

敏子

ヒシクイを遠目に村の鴉かな

〃

### はがき句報三十四号管見

飯田孝三

バス停に理想郷あり涅槃西風

高志

羨ましい日頃ぶりが手にとれます。春です。しばし、バスを待つ間の頬を風が吹く。さて、どこへお出かけ、お目あてはそう遠くないでしょう。きっと、佳句、秀吟

がたとと得られるに違いありません。

「あり」は、自得の余裕。その「すがすがしき」が「理想郷」と「涅槃西風」とに快隙。風が吹き抜け、春を告げます。

### 忘れ物して身の軽き余寒かな

敏子

お出かけの途中で、忘れ物に気づく。「まあ、いいや、なくったって……」、なにせ、小さな忘れ物。「でも、ちょっと口惜しいな……」。お揃い、バスでのことでしょうか。「身の軽き」と照れて、さりげく、「余寒」とつける。憎い。ほんとに「さり気なく」、深く、面白い。いやいや、ぼくなんか、十年以上も前から、遠出に、日に三度欠かせぬ、大事な物を忘れたことがあります。二度も。

### ビル多き佃島にも露の臺

高志

佃島界限にも、めつきり高層ビルが増えた。岸に寄る小魚たちも目が眩むだろう。でも、敷きつめられた舗道はずれの、へってしまつた路地隈や公園の隅には、どこい、露の臺が頭をもたげる。あつぱれ。「にも」に籠もる“生の声”が“理”を近づけない。

### ヒシクイを遠目に村の鴉かな

敏子

村の鳥と昵懇である。白鳥ら、やつぱり帰つてしまつた。どれどれ、まだいる、鴻が。そこはか、遠目に旅支度。おいらは村の王さまだ。「ヒシクイ」のカナ書きも周到である。「ヒシクヒ」の旧カナの方がよくはないか

な)「かな」の軽みが抜けている。

### 寒満月子別れの儀のありさうな

始子

寒満月が冴え冴えと、今し、子別れの段。メルヘンの主は、狐、狼、それとも、むじな、いたち？ なにか、寒満月が身につまされる。「ありさうな」がうまい。

以上、「34報」管見です。毎度、大変、遅くなつてご免なさい。  
(平20・03・24)

### お便り広場(到着順、敬称略)

拝復 玉誌「白金蔑」第32号(H25—10月号)を拝受。ハイペースの発刊にも敬服感心。

### 「鳥籠に雀きてをるお正月」(喜々)

小中学時代の一四松、セキセイインコ、カナリヤ、ウグイスなどの飼育の楽しさや多忙な世話を懐かしく想い出す句。籠の鳥のエサのおこぼれに雀が来ることは、よくある光景。お正月ののどかな朝日の当る鳥籠の中と外の小鳥の姿を想像できて心暖まります。

### 入院10／2(水)以来すでに二十八日間の入院生活。

六階の窓からの広い広い空や街や森の景色に美しい夜景三食シャワー付き、且医療サービス付き高級リゾートホテルが別荘のホテル生活と錯覚しそうです。

十階建の白い大きな大きな大病院「独立行政法人病院機構千葉医療センター(中央区椿森四丁目一一) 大駐

車場500台以上。戦前の陸軍病院の由。若い美人の親切な看護師さんたち。千葉大医学部付属病院は文部省、こちらには厚生省とか。防衛省ではないらしい。

目下人工肛門（腸閉塞で大腸がんが原因の由）。11月五日（火）に二回目の手術。別の処に人工肛門を開設。半年後くらいに人工肛門閉鎖の手術。合計三回の手術。東条英機氏以下の絞首刑や大石内蔵助らの切腹、石田三成の斬首刑などを想像して覚悟を決める。小心者の私の心の内です。

入院生活でせめて活字作品を拙作でも一つでも多く書いて残したい心理を強く強く感じております。「もしかしでこれきりではと想いつつ書けばふるえる我が文の文字」（由紀夫）と下手な短歌も書いてみたくなります。何時死んでも後悔の少ない毎日の生活を目標として生きるべきであつたようで、今になって反省しています。玉誌「白金葎」が50号100号200号と益々隆盛でありますことを心から祈念申し上げます。感謝して一筆お礼と感想などまで。奥方様共々ご健康とご健筆とを心から祈念申し上げます。

光成高志様 御机下

河村博旨

敬白

（青江由紀夫ペンネーム）

H25—二〇—三10/29（火）

白金葎十月月号拝受いたしました。益々の充実、天高く

舞う姿のようです。私は相変わらず底辺をハイズリマワッテいる感じです。ミステリー？らしきものばかりで毎日を送っています。11月29日は病院行きで残念です。夜だけならと想いましたが、それも失礼かと思ひ欠席させて下さい。それにしても「立冬」「朴落葉」の参考句すばらしいものが沢山ありますね。よく調べられましたね。それと我孫子日記と編集後記それこそ俳句一筋の生活ぶりがわかります。益々の御活躍を祈ります。11月二日〜4日神田古本祭りに出かけてきます。

（10・30 小山陽也）

拝啓 お手紙を拝受拝読。ヘルニア治療記「闘病記録」。玉著『アビコから九段坂へ』（東京経済）を拝読。サラリーマンが腰痛。さらに一二七日間の入院生活。大変な闘病生活。出版は大事業の一つに敬服。今日11月二日（土）で三十二日目の入院生活。しかし、定年退職後の入院生活。これが現役時代の入院生活だったらどんなにか焦燥感にかられたことであろうと思います。

大腸ガンの手術は11月五日（火）、同時に人工肛門も設ける由。これは半年一年の後に閉鎖埋設手術を予定している由。七十四才と半年の老人。いつ死去しても悔やむことのない一日一日としたいと念じております。

あやめ咲く水路花嫁舟で来る（遠星集）

「潮来花嫁さん」の花村菊江さんの若い頃の歌声を連想。

時が来て皇居の土堤が花の土堤  
菜の花の黄も皇居の土堤の色  
女子大生袴に靴で卒業す

各々図柄がパツと描けます。

右 まずは感謝して一筆御礼申し上げます。奥方様共々  
のご健康とご幸運を心から祈念申し上げております。

光成高志様

河村博旨

敬白

H 25—二〇—三11/2(土) am 08—40くもり  
追伸：切腹の日取りも決まる武士<sup>ものふ</sup>を想えば何も悩む  
ことなし

由紀夫

とやや自嘲、やけぎみになる心境です。

先日はお世話になりました。楽しい句会でした。別所  
線邂逅の写真を有難うございました。土曜日から出づつ  
ぱりで、拙稿の送信が送れました。邂逅「命八つ」の句  
もと思いましたが、間に合いません。後日、あらためて  
送稿します、次号以降に追録して下さい。寒さ深まる、  
未曾有の異常気象ゆえ、ご夫妻共々、ご自愛とご清吟の  
程を念じあげます。草々

(平 25・11・19 飯田孝三)

受贈誌(十一月号)

屋形船舫ふ薄暑の柳橋(飛行雲 68号)

駿河岳水

千万の柿に埋もれ柿を剥く(彩 113号)

平野ひろし

柿乾く尻に甘露の滲み出て (〃)

〃

朝顔や区の広報車喋り過ぐ (あすか 11月号) 山尾かつひろ

### 俳窓評論纂

＊ 幸一さんから「阿片患者」なる一文を貰った。先の  
蓮見舟吟行の様子を象鼻杯にしぼって丁寧に描写さ  
れている。こういう文章を読むと、風狂な遊びが風  
流を超えて風雅になってくる。これは「五月雨の鴉  
の浮巢を見にゆかむ」に通じると思います。この象  
鼻杯もその行為の延長線にあると思えます。幸一さ  
んの「蓮酒を阿片患者の如く嚙む」との句を得た今  
は、益々その趣が出てきたと思えます。

＊ 青江由紀夫さんから貰った同人誌「楔」第30号二〇  
一三年版に武田修一氏の随想は合点々々である。「長  
閑な田園に映える今井堤の桜並木」の題にく安然ぐ  
やいと美しき花筏くと俳句の副題が付いている。何  
故合点かというと、この今井堤は私の住まいの前方  
一里足らずのところであり、知る人ぞ知る花見の穴  
場であるからで、私は毎年弁当を作ってその堤で花  
見がてら昼食を取って昼寝をするのをひそかな楽し  
みにしているからである。氏の文章は風流人の好意  
に満ちた内容になっている。

＊

山尾かづひろさんの投句している結社「あすか」が11月号で通巻500号に達し、創刊50周年と重なるのか。150頁の分厚い俳誌となっている。かづひろさん連載の大江戸日記は今月も源氏物語を話題にしている。これに加えて、来年から「正岡子規」を連載するとして、「子規の血脈」が載っている。私なんかも芭蕉の軽み以後という大命題に取り組むことになって、何でもこんな大それたテーマに入ってしまったか、頭を抱えることが多いのですが、かづひろさんはこれ以上です。源氏物語を終えて、子規とは！恐れ入谷の鬼子母神ですが、期待しています。

＊

幸一さんの「銀杏散るまつた中に法科あり」（山口青邨）の口ずさまれたことに誘起されて、俳句研究の山口青邨読本（昭和四十六年十一月号）の中の「二つの世界／古館曹人」を又読んでみた。四Sの提唱が青邨によってなされたのは、昭和四年のホトトギスにおいて「秋桜子君にしても、素十君にしても、青畝君にしても、誓子君にしても・・・この四人は何と云っても今日俳壇の寵児であり流行児であります。東に秋素の二Sあり！西に青誓の二Sあり！なんて大見栄を切ったなら議政壇上であれば確かに聴衆を唸らせるところですが」。少なくとも今日はこの人達の天下である」の随筆が掲載されて、四Sの

名称の起源となつて、青邨の言わんとしたことより、四Sの名称がもてはやされたくらいがある。曹人さんは青邨の四S提唱の意図を正しく理解せんこの一文を書かれたものでしょう。「当時、昭和の初期、虚子は水原秋桜子・山口誓子の西欧的・絵画的・進歩的な風潮を嫌い、高野素十の即物的・東洋的な作風に傾き、写生に客観の二字を冠し、更に進んで花鳥諷詠論を激しく主張した。即ち客観写生派を重視し、前二者の理想派を退けたのであった。青邨は秋桜子に兄事し、自らも富安風生と共に理想派にありながら、四Sという名のもとに虚子に向つて両派の両立を叫んでいるのである。」

要するに、青邨の四S提唱の意味は、「ホトトギス」を離れていく秋桜子への友情ばかりでなく、二つのものの両立の主張であつたのだ。理想派と客観写生派の共存を「ホトトギス」のために願つたからにほかならない。俳句は両派のひろがり可能性をもっていることを進言しかつたのだ。青邨は最初はホトトギスに文章を書いていて文章から虚子に近づいたのだ。昭和六年には青邨が書いた「田端に居る頃」を虚子が激賞した。二人の関係は写生文にある。散文も書ける俳人が青邨であり、馬車馬のように俳句一筋に職人修行をする俳句職人を嫌う。青邨は山口

吉郎という東大工学部の教授の名を持っている。山口青邨は俳号である。所謂二足の草鞋を履いた人間なのであった。今では生活と芸術の両立と言ってもよい。その大先輩は森鷗外であって、サラリーマンの哀歓という視点から、営々と鷗外作品を分析した吉野俊彦さんの時代もあった。三〇年くらい鷗外に遅れて二足の草鞋を履いた学究生活をおくったのが青邨である。一つに決め付けるといふ窮屈な発想は初めから持ち合わせていないのだ。鷗外や青邨のような華やかな経歴があつてこそ二足の草鞋と思う先に、無言館で見た、戦没画学生の一歩の悩みは、生活と芸術の両立であると切々と手紙に書かれてあつたのを見た。またつい最近知り合つた工芸作家の門田祐一さんもこの両立に苦労したと云う。私と話が合つて直ぐこの点で合点し、親しみを感じたのである。どんな世になつても、生活と芸術の両立は永遠のテーマであらうと思う。

## 増田陽一「ファールブルの机」鑑賞（2）

光成高志（05/6/1）

### 陽炎がジュラ紀の土を崩しゐる

ジュラ紀は一億四五〇〇年前の中生代、恐竜全盛の時

代である。空には翼竜が飛び、鳥類の祖先始祖鳥も出現した。海では魚竜、首長竜などの爬虫類が栄えた。そのジュラ紀の土は今も風化の時間を刻んでいる。大吠崎にはその後の白亜紀の岩が露出しているが、ジュラ紀の土はどこで見られたのでしょうか。陽炎が崩しているという見立てが感覚的であるが、物理的にも合点がいく。筆者は地層を相手に仕事をしたのでこの句に親しみが湧いた。地層といつても新生代の第四期を相手にする。硬い岩になつている第三紀層は建築には問題ないから、その区分が出来たら素通りする。最近、第四紀を80万年古くまで遡れる研究があつて、第四紀は従来の百八十万年前から260万年前に変更されるそうだ。

### 芭蕉のかるみ以後（30）

光成高志

芭蕉の軽みは芭蕉晩年の芸境であるが、その萌芽は江戸に下る年の「貝おほひ」にあることを述べた。談林風のとつぴな型破りをやつて「貝おほひ」という処女出版に賭けたのである。宗房が下江して翌年の延宝二年頃に江戸で出版され、再版が出た証がある。きつと江戸の人には面白かつたのだ。宗房のそれまでの学問を突き抜けて、洒落な青年宗房の個性から生み出されたものだ。学問を己が物として自由に通俗に生かした点で、宗房の無

意識の輕みをなした句集と見ていいと思う。江戸に下つてから直ぐに俳諧で生活できたわけではなく、京で知りあつた日本橋の小沢太郎兵衛宅に居候して書記役をして生計を立てていたが、数年後には、神田上水の浚渫請負人としてかなり大仕事が出来るまで世間の信用を得ていた。俳諧の方も北村季吟から連歌俳諧の秘伝書「埋木」の伝授を受け、俳諧の座に出て俳諧師と面識をもつようになつていった。延宝三年は下江後四年目である。江戸に来た西山宗因の歡迎百韻俳諧の一座に参加、初めて桃青と名のつた。これは李白の号を真似て、桃青としたのである。李白は、すももが白いという意味であり、桃青は、母方の桃地姓から桃を使い、桃が青いとしたのである。宗房の号は藤堂家に返上して、江戸にて俳諧師として世に立とうとする意志の表れである。又、この頃、撫付髪をしていたのもそれである。芭蕉の俳諧は初め貞門であつたが、段々談林風になり、この時は時代の先端を行く西山宗因（一六〇五—一六八二）の談林俳諧に追隨している。後の去来抄には「上に宗因なくんば、我々が俳諧今以つて貞徳が涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なり」と語っている。芭蕉はこの百韻の中で付句七句が選ばれている。

いと涼しき大徳成けり法の水

軒端を宗と因む蓮池

宗因

しょう畫

反橋のけしきに扇ひらき来て

石壇よりも夕日こぼるゝ

（中略）

座頭もまよふ恋路なるらし

そひへたりおもひ積て加茂の山

（中略）

時を得たり法印法橋其外も

新筆なれどあたひいくばく

以下略。この年延宝三年には既に腹も定まり、名も知ら

れ、桃青を慕つた宝井基角十四歳、嵐雪二十八歳、杉風、

嵐雪それぞれ入門しており、煩悶した気持ちをもつ切つ

て、終に無能無芸にしていただ此一筋につながる生活にな

つた。留まることなき新風への歩みが始まつたのである。

行き着く先が輕みとは誰も思わなかつた時代である。

## 詩

### 鎌倉断章

#### I

潮の香りを湛えて

砂に埋まつた河口

滑川の川底は浅い

#### II

ヤトの奥はもう秋

幽山

桃青

宗因

桃青

信章

桃青

隠れ里の水は冷たい

III

彼岸花の咲く崖つぷち

ヤグラの奥まで

薄ら日が差し込んでいる

IV

古い街道の入り口

地藏さんとサエの神と

二体並んでいる

V

すたれた街道に

萩の花が散って石仏の

頭を飾った

vi

ヤトの上空

紺碧の空に

とんびが舞っている

vii

崖にイワタバコが咲いている道

知らない犬がついてくる

viii

すり減った石段の脇

五輪の塔がかたまっている

ix

東勝寺の谷は深い

昏いヤグラの奥は

一本だけの供養塔

白い萩が散っている

x

紅つけたおんなど

首はねられた武将の伝説

化粧坂をだまって越えた

xi

目の前に海のある寺

観音の瞳が

海を映している

xii

茶の花の白が

さみしい

水仙の花も

さみしい

注

滑川は鎌倉市内の東部を流れて油比ヶ浜に注ぐ川

ヤトは山間の低地をいう

隠れ里は佐助が谷の奥の佐助稲荷一帯をいう

ヤグラは掘りくぼめた方形の墓地。覚園寺裏百八ヤグラが有名

## 我孫子日記

10/18 例会。10/23\*ターナー展。10/24、25 久寺家中。10/26 京橋。11/1 2\*六本木。11/2、3\*佐久平↓別所温泉。11/6 SOA。11/8 萱吟行句会<sup>4</sup>\*（市川）。11/9 六本木。11/10 真栄寺報恩講。11/15 例会。

\*ターナーの絵にも一本松立てり

2\* 良夜てふ漆の月の大きかり

3\* 文化の日望月駒の草競馬

農耕馬もレースに挑む文化の日

マイクから馬の嘶き文化の日

ポニーのポンタも走る文化の日

釣瓶落とし二両電車に灯が点る

秋澄むや玻璃越しに見る朝日山

秋の雲流るる下の無言館

野の錦一家団欒の絵を残し

無言館出で青りんご少し食む

ご夫妻に会ふ別所線りんご畑

<sup>4</sup>\* 冬に入る桜古木の突つ支ひ棒

弘法寺に赤門ありて木の実落つ

白文鳥さがす貼り紙冬始め

真間の井の水の光れる小六月

高志

高志

みち

〃

〃

みち

高志

〃

〃

みち

〃

良子

野里子

朋子

トシ子

豆腐屋の路地に物干す小春かな  
黄落や黒猫の眼にそを見たる

敏子  
高志

## 編集後記

今月は色々な人に会った月である。1日には日展の初日にて門田祐一さんという竹工芸作家に会った。同郷の芸術家ということで綾女さんが紹介してくれた。祐一さんの人脈でまた多くの作家を知った。美術の秋の季語を満喫した気分である。その一週前は上野のターナー展と興福寺の仏頭展を見ていたから。

文化の日には佐久平の草競馬を見た。一日で帰るつもりであったが、正美さんに別所温泉の地図を先月頂いていたので、佐久から別所温泉に移動し翌日、朝の珈琲館で元J.Tの鍼灸師夫妻に会った。前山寺と無言館に入って出て、帰路についた。シャトルバスの時刻にあわせて行動していた。塩田町駅で別所線に乗ったら、孝三さんにばったり逢った。お互いに驚いた。孝三さんは家族の方と同行されていたので、これも一驚した。上田駅では、同地の高校生からインタビューを受けた。みちさんと健夫さん（孝三さんのご子息）が対応した。

その邂逅の余韻に浸りながら本誌を編集した。次回の吟行は隅外の作品の一つ「青年」の散歩道を歩く予定である。



「潮騒」門田祐一作（2013 年日展入選作品）

花籠（同氏よりの受贈品）

白金葎 第33号 平成25年11月発行  
編集・発行人 光成高志（FAX 04 - 7187 - 1068）  
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17  
表紙の題字：加納綾女。写真は白金葎